

研究動向

比較研究の方法論とその展開

中井 章子

本プロジェクトは、多様な学問分野で行われる比較研究の実状を調査し、それぞれの方法論を明らかにし、今後の展開の可能性を検討することを目指している。

この企図の背景には、青山学院女子短期大学専攻科において、短期大学卒業後2年間学修し、「比較文化」という学問分野で「学士号」を取得する道が開けたということがある。「グローバル」になった21世紀に、文化圏を横断し、文化ジャンルをまたぐ研究の必要性はますます増え、「比較」をかかげる研究は多くあるが、方法論としての検討はいまだ不十分なのが実情である。さまざまな比較研究が、それぞれの理解のもとに「タコツボ化」しがちで、異なる専門相互の比較方法論の検討、議論は盛んとは言えず、比較研究の全体を概観することも難しい。そのような「なんでもあり」といった研究状況がある。いっぽう、「比較文化」で「学士号」取得を目指す学生は、専門的学問のしっかりした基礎なしに、21世紀の二十歳の関心から興味のもてるテーマを選ぶ。論文指導者は、学生一人ひとりの「研究」に伴走し、それが「比較文化」の論文になるようにアドバイスする。そのような現場状況をふまえ、この研究プロジェクトは、比較研究の豊かな可能性をそれぞれ展開しつつ、方法論を省みて、研究を確かなものとなそうと志している。研究分担者——秋富創（経済学）、宇都宮由佳（食文化・家政学）、鈴木俊之（比較教育学）、辻吉祥（日本文学）、橋本典子（哲学）、中井章子（ドイツ思想史・比較文化論）——は、異なった専門を基盤とし、比較研究をしている。

2015年度には、専門家を招いて講演会を7回

開催し、講演後の議論と意見交換を通して、相互理解と各自の比較研究理解を深めた。

第1回（2015年6月23日）としては研究分担者の辻吉祥が「比較／差別のソフィスティケーション—素木しづ・キャリア・優生学」と題して話し、比較研究における「比較」という考察の形式それ自体のあり方について、近年の Rey Chow による議論も俎上に載せながら、比較される両項の実体視化の問題、差異の思想におけるモダンとポストモダン、比較思想の名の下の社会的差別や政治的無意識などの観点から論を展開した。引き続き会場からは、偏見の是正と固有性の尊重としての「比較」の意味が提示され、共に考察が深められた。第2回講演会（8月4日）では、Ping Wang（王萍）氏（重慶大学）を招き、「日本と中国の美意識——自然観を中心として」との題のもとに、今道友信の中国哲学研究、孔子と荘子のテキスト解釈、特に美の概念を中心に比較研究の実例を中国側から報告していただいた。第3回（11月24日）では、外山みどり氏（学習院大学）が「心理学における文化研究」と題して、心理学における文化研究の歴史、実証的研究の例、個人主義と集団主義、文化的自己観、こころと文化の相互構成、自尊心関連の文化差、認知・思考様式の文化差などについての研究を紹介し、心理学的文化研究の可能性と問題点を論じた。第4回（12月10日）では、樋笠勝士氏が、「経験と比較文化の可能性」と題して、専門研究における比較と、日常生活における比較を二つの軸に、比較研究の方法を論じた。専門的比較研究に関しては、20世紀における中村元、ヤスパース、マンソン・ウルセルなどの比較思想研究が紹介され、方法論

が論じられた。ついで、哲学における身体論の問題との関連で、習慣や言葉や他者のテーマが語られ、最後に、比較の方法としての経験的認識が再考された。海外にホームステイした学生の異文化体験のような「原初」的経験をも含むような「比較の方法」の示唆が与えられた。第5回(2016年1月12日)では、環境ジャーナリストの井上雅義氏が「ソーシャルメディアによる途上国支援事業の影響と変容」と題して、WEBの発展的変容とソーシャルメディアの登場と進化が、社会にどのような影響をもたらしているか、そのことが世界の最貧国支援プロジェクトと最貧国の自立に及ぼす影響を論じた。サブサハラの具体的な例をあげて、グローバリズムとローカルリズムの相互作用と、インターネットやソーシャルメディアの普及から生じる問題点が紹介された。第6回(2月4日)では、野村祐之氏が、「比較研究の方法論と『オリエンテーション』～神学的試論として」と題して、我々の日常性における無意識的観方の偏りの実例を示しながら、西洋はキリスト教的視点で、日本は文化的視点でそれぞれの偏りを無意識のうちに受容してきたと指摘した。(実例の一つは西洋が「左から右へ」、日本が「右から左へ」物事への視線がある)この偏りを、画像が多く示された講演の中で、実感をもたせながら経験し意識化することが出来た。第7回(3月17日)には、東京海洋大学教授の森下稔氏を招き、「多様性に富む比較教育学ーよってたかってー」という題目で講演をしていただいた。比較教育学には多様な手法や学問観が存在しているが、なかでも従来からある地域研究と1990年代になって特に増加してきた開発研究の接点を求めようとする中で生まれた著作(山田・森下編著『比較教育学の地平を拓く』東信堂、2012年)を中心に、比較教育学における比較の意味などについて話された。

2015年度、研究分担者はそれぞれ自分の専門とする分野における比較研究の実例を明示し、方法論を具体的に示し、意見交換した。また、資料収集とその検討をとおして、それぞれの具

体的分野における比較研究を進めた。

秋富創は2015年度、青山学院の在外研究制度を利用してオランダ・ライデン大学付属の研究所にフェローとして在籍した。現地においてはライデン大学の教員・学部学生、日系企業における勤務経験のある大学院生、日本人会の会員、経営コンサルタント、といった様々な人びととの交流やインタビューを通じて、日蘭比較の観点から、オランダの教育制度、雇用、労働といったことに関する貴重な情報を収集することができた。

宇都宮由佳は、タイにおける外来の食文化について文献・資料収集およびチェンマイの大学生(男子35名、女子35名、計70名)を対象にアンケート調査を実施した。外国料理店は日本食店が最も多く、健康志向を高まりともに、2007年724店舗から2015年2,619店舗にまで増加した。大学生が好きな日本食は寿司であり、嫌いなものは刺身であった。一見矛盾したように思えるが、「カニかまぼこ」「とびこ」など加工食品が人気のネタで、タイ風にアレンジされた寿司が普及していた。

鈴木俊之は比較教育学における研究方法をテーマに研究を進めている。15年度はその基礎的作業として比較教育学関連の文献の収集に徹した。16年2月に京都大学大学院教育学研究科に出張し、比較教育学関連の古典の文献を中心に収集し、比較方法などについて検討をした。その後京都大学の関係者と比較方法などについて意見交換をするなどした。

辻吉祥は、第1回講演会の考察をさらに進めるとともに、差別の対象となったハンセン病に関する日本の社会的言説を、旧植民地・朝鮮半島におけるそれと比較するため、現地に渡り、資料収集、考察をすすめた。

橋本典子は、15年はユルゲン・ハーバーマスの提起した問題、Cosmopolitanism について考察し、特にEUを具体例とした社会における超国家的市民の連帯の在り方について考察した。16年に入り、現在日本社会の市民性の問題を「正義」の概念を中心に考え、比較研究を行っ

ている。

中井章子は、1800年前後のドイツ語文化圏における「比較」の方法について、ヘルダー、ゲーテ、ノヴァーリスなどの思想家に焦点を当て考

察している。また、青山学院女子短期大学で約30年間行ってきた「比較文化論」の講義における「比較」の方法と教育結果について、省みま
とめる予定である。